

友だちとともに、集中持続して活動する子

野坂 尚史

はじめに

落ち着いて課題に取り組みず、注意散漫、かつ多動。友だち、特に弱い児童への乱暴な行動が多く、自制することができない。物事に感覚的にすぐ反応してしまうK児が、少しは落ち着いて、没頭し、集中する活動は準備できないものか。また、友だちに対して、叩く、押すなどしてその反応を楽しむといった誤学習をしているK児を行動分析的に修正し、直していく手だてはないものか。こうした問題意識をもち、K児について事例研究することにした。

1. プロフィール

(1) 生育歴

昭和55年2月9日生 11歳8か月 小学部6年生 男子。

- 水頭症。後頭部随膜瘤のため生後5日目で手術。
- 乳児期は表情乏しく、抱かれにくい感あり。
- 歩行の獲得が遅れ、1歳半から3歳半までT療育園で週2回の歩行訓練を受ける。(2歳10か月で歩行獲得)
- 3歳9か月と4歳4か月の時に発作を起こす。これを機に発達が遅れる。(脳波の異常が認められる。)
- 4歳～6歳。私立A幼稚園にて健常児集団の中で過ごす。
- 6歳～8歳。市立F小学校の障害児学級で過ごす。
- 9歳で本校小学部3年生に転入し、今日に至る。

(5年生時から、筆者が、この取り組みを実践する。)

(2) 諸検査による実態

図1、図2を参照。全発達年齢は、およそ3歳。また各項目を見れば、運動・感覚の発達にくらべて、特に社会性(「対人関係」「言語理解」)の発達に落ち込みが見られることが分かる。まだまだ、発達過渡期であることから、本年度も昨年度同様に、基本的には、運動・感覚分野をさらに伸ばしながら、言語、社会性を伸ばしていく取り組みを行っていくこととするが、本年度は、落ち込み部分をひきあげることも少し強調したアプローチをしていきたいと考える。

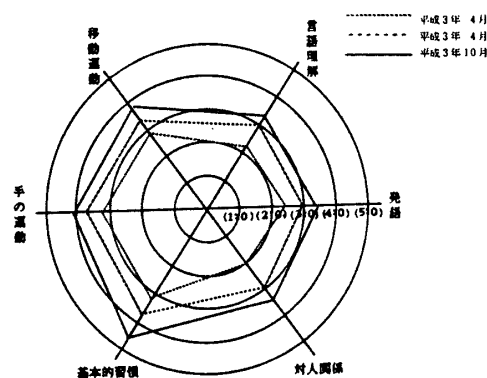


図1 遠城寺式乳幼児分析的発達検査によるプロフィール

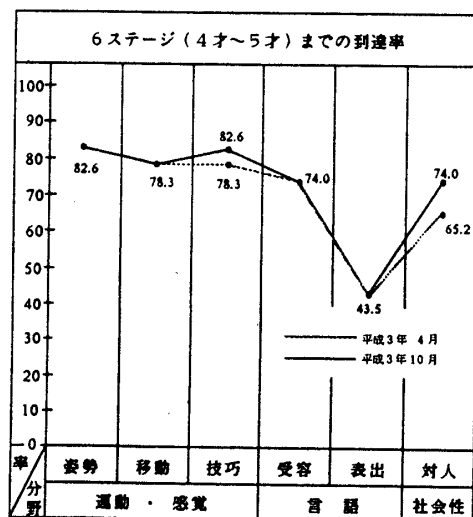


図2 MEPAによるプロフィール

(3) 行動特性

K児の行動特性を、社会性、からだ、興味・関心の3つの観点からまとめたのが、表1である。K児の行動特性も生かした取り組みを実践したいと考えた。

表1 K児の行動特性

項目	平成2年4月の実態	平成3年4月の実態
社会性	<ul style="list-style-type: none"> ・「だめ。」と禁止すれば、その事に増々固執し、自分が何をしているのか忘れてしまう。 ・友だちに対して、ちょっかいや乱暴な行動が多いため、協調した活動ができない。 ・感覚遊びの段階で、思考した行動ではなく、感覚的な快を求めた行動が多い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「だめ。」と禁止された時、少しはがまんでできるようになる。 ・自分の好きな活動を通してであれば、少しは協調的な活動ができる。 ・感覚遊びも多いが、みため・つもりの遊びが見られるようになってきている。
からだ	<ul style="list-style-type: none"> ・手足の分化ができておらず、器用さを要する活動はできない。 ・下半身が非常に弱く、ころびやすい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・文字をなぞったり、線にそってはさみで切ったり、線にそってぬり絵ができ始めた。 ・下半身が少し安定してきて、あまりころばなくなった。
興味・関心	<ul style="list-style-type: none"> ・歌をうたうのが大好きで、いろいろな歌を大きな声で上手にうたうことができる。 ・絵本の読み聞かせをしてもらうのが大好きで、よく読んでくれとせがむ。 ・非常に動物好きで、ねこ、にわとり、犬などとてもよくかわいがる。 	(平成2年4月に同じ)

2. 取り組みの構想

(1) 指導仮説

上記の実態を踏まえ、K児が友だちと協調的に関わり、友だちとともに、集中持続して活動できるよう指導仮説を次のように設定した。

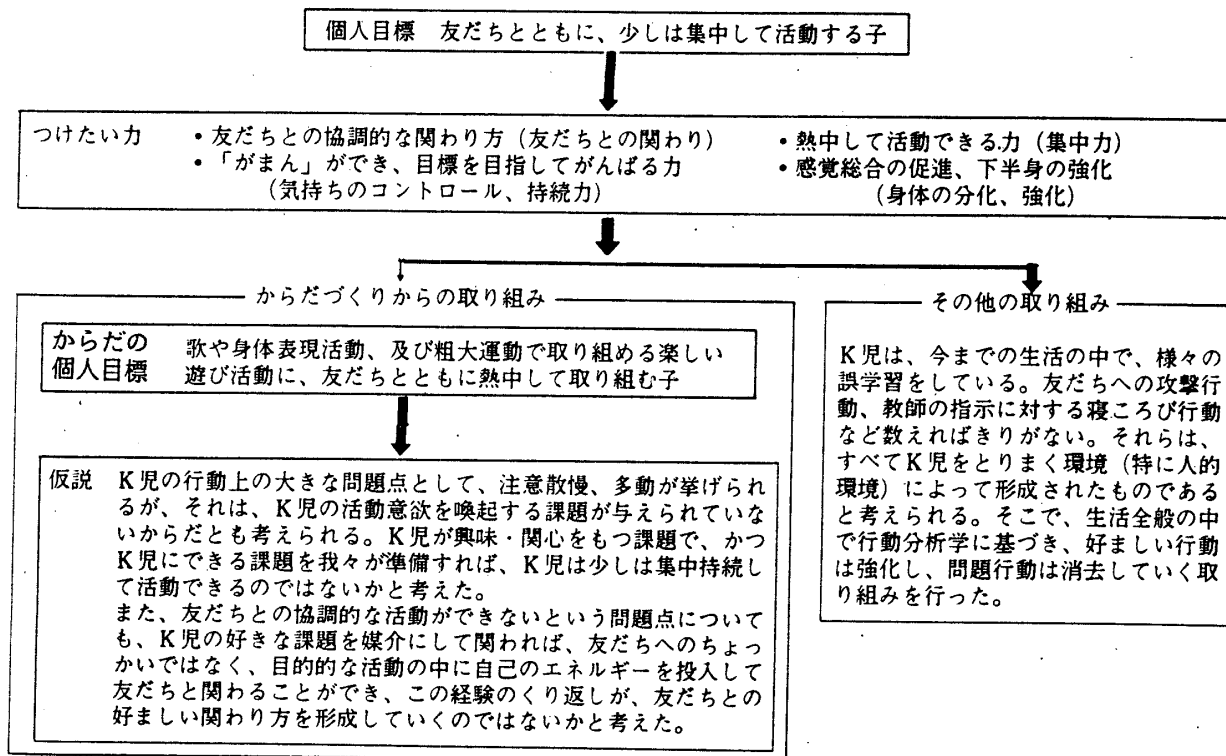


図3 K児の指導仮説

(2) 指導の手だて

昨年度の実践を踏まえ、K児の精神発達（ことばによって、ある程度行動統制ができ始めたこと）により、本年度は、下記の2点を指導方針とした。

- ① 授業においては導入部に注意し、興味・関心を引きつける。また授業から離脱しそうなときはK児の好きな活動を臨機応変に入れ、再び授業の中に引き戻す。
- ② 問題行動については、「ダメ。」と言って禁止し、積極的に負の強化をする。
(ちなみに、昨年度は、無視という消極的な負の消去を行っていた。)

実践の場としては、次の3つに整理することができる。

- ① からだづくりを通して積極的に望ましい行動を作る取り組み（主として生活単元学習）
- ② からだづくりを目的的に行う取り組み（養護・訓練、体育、日常生活の指導）
- ③ K児の表出する行動に行動分析的に応える取り組み（学校生活全般）
(ここでは、紙面の都合もあり、①と②について実践を述べていく。)

3. 指導の実際

- ① からだづくりを通して積極的に望ましい行動を作る取り組み

(a)生活単元学習「たなばた発表会」—劇活動—の取り組み

本校小学部では、6月下旬から7月上旬にかけて「たなばた発表会」という単元を組んでいる。この単元では、笹飾り・たなばた飾りを作るという内容の他に、これまで他の教科・領域で行ってきた成果の発表や、以下紹介する劇発表をすることにしている。K児は、お話好きであるのに加え、歌や身体表現活動が好きなので、絶好の取り組みの場であると考え、実践の場として取り上げた。

○劇活動の基本的な考え方

劇活動を実施するにあたっての基本的な考え方は、劇のできばえがどうであるのかという以前に、児童一人ひとりがどれだけ楽しんで、自分の役を果たしたのかどうか。仮に劇の流れがつかなくとも、その場その場のおどりやアクションにどれだけ没頭し、集中して取り組めたかを大切にしたいと考えた。

表2 劇の流れとK児の主たる活動

展開 項目	1	2	3	4	5	6
劇の 流れ	幕が開く。たなばたの夜、天の川で、おり姫とひこ星が会う。一緒に「たなばたのよる」を歌って踊る。	楽しい時も束の間、おり姫と別れの時が来る。ひこ星は、悲しみのあまり、やけ食いを始める。その結果、太ってしまう。	そこへ、力士登場。すもうをすればやせると教え、一緒にすもうをする。しかし、やせない。途方にくれるひこ星。	そこへ、イルカ登場。「イルカはざんぶらこ」の曲に合わせてダンスをすればやせると教え、一緒にパンプーダンスをする。しかし、やせない。	そこへ、ダンサー登場。やせるためには、エアロビクスダンスが一番と教え、一緒にエアロビクスダンスをする。やせて、ひこ星は大喜びする。	一年が経ち、ひこ星とおり姫はめでたく再会。曲「星空のカーニバル」に合わせて、フィナーレの踊りをおどる。
主たる 活動	・歌「たなばたのよる」をうたう。	・歌「ガブリ、ムジャ、ムジャ」をうたって食べる動作をする。	・力士「おむれつ山」とすもうをとる。	・曲「イルカはざんぶらこ」に合わせて、パンプーダンスをする。	・曲「ランバダ」に合わせてエアロビクスダンスをする。	・曲「星空のカーニバル」に合わせて、元気に踊る。

○劇の概要とK児の主な活動について

この劇は、「太り過ぎですよサンタさん」(さくらともこ作、岩崎書店)をベースに季節柄、子どもたちの興味・関心、経験の様子を考慮して改作したものである。同じパターンでストーリーが展開するおもしろさが児童の実態に合ったものと考えた。

劇の概要とK児の主たる活動は、表1に示す通りである。

○K児の取り組みの様子

取り組み当初は、全体の流れがつかめないで、部分的な楽しさを求めて活動した。例えば「やかましーい。」と言いながら、召し使い役の先生を押し倒す動作とことばが気に入って、そればかりを繰り返し、劇が先に進行しないことが何回もあった。また、すもうが好きなので、自分と友だちがすもうをする場面は、目を輝かせて参加した。さらに、「ガブリ、ムシャ、ムシャ」の歌をうたって、くだものを食べるアクションをする場面では、どんな場合でも劇活動の中にもどってきて演じることができた。主役である本児が、当初、自分の気に入った部分しか参加しないこと、また気に入った部分は、自分の気の済むまで何回も繰り返すということで、指導者は劇練習をする上で大変困ったが、代役を臨機応変に指導者が行って、本児がまた入ってきた時に交代するというやり方でしばらく劇練習を続けることにした。指導者としては、先にあげたK児の好きな部分を核として、そこを中継点に、K児ができる限り劇活動に参加できるように心がけた。

さらに、家庭に配布した劇練習用テープ(指導者たちがセリフ、音楽等を吹き込んだもの)の効果もあって、K児は5回目の通し練習あたりから、全体の流れがつかめだすとともに、先に挙げた3つの好きな活動以外も少しずつ取り組めるようになってきた。予行演習日(9回目の練習日)では、大体のセリフが言えるとともに、劇らしい活動ができるようになった。そして、当日では、母親をはじめ、大勢の参観者が見る中、楽しく歌って踊り、セリフもほとんど完璧に近い状態で演じることができた。(写真1)



写真1 劇を演ずるK児

○劇活動を終えて

この劇活動を終えて、見通しをもち、熱中して活動する力が育つとともに、集団の中で友だちと共に協調的に活動できる態度が培われたように感じられた。

(b)生活単元学習「修学旅行」—思い出作品づくり—の取り組み

小学部の高学年クラス(複式学級5、6年生のクラス)は、今年度、神戸方面へ修学旅行にでかけ、須磨水族館、王子動物園、ポートピアランドを観覧してきた。その思い出を何かのかたちに残させた製作活動の取り組みについて記してみたい。

○製作活動の基本的な考え方

作品のできばえも大切であるが、それ以上に児童一人ひとりが、どれだけ楽しみ、熱中して作業

に取り組めたかということ大切にしたいと考えた。そのために、作品づくりの過程が十分楽しめる素材を使用すること、またその過程に遊び活動を取り入れることを考えた。

○思い出作品づくりの概要とK児の活動について

思い出作品は、K児が六甲牧場で見た羊を砂絵で表現させ、そのバックは、色画用紙の上を絵の具のついたビー玉をころがして製作させた。また、それを入れる額縁も紙粘土をこねさせてK児に製作させた。その概要とK児の活動について、表3に示す。

表3 思い出作品づくりの概要とK児の取り組みの様子

展開 項目	1 背景づくり	2 羊づくり	3 額縁づくり	4 作品の完成
概要	ダンボールの箱の底に画用紙を固定し、その上を絵の具のついたビー玉をころがして模様をつける。	羊のかたちに取り取った画用紙を与える。はけでのりをつけ、その上に砂をふりかける。乾いたら、吹いて余分の砂を落とす。	紙粘土を使用し、型に埋め込みながら、額縁をつくる。乾いたら、その型を取り除く。	1で製作した背景の上に、2で製作した羊を置き、のりで固定する。さらに3で製作した額縁の中に、それらを入れ込み、完成となる。
K児の様子	何回も色を変えては、ビー玉ころがしを楽しんだ。熱中して活動することができた。	ハケで何回もこすって、のりをつけた。手で砂をすくっては、羊の上に向け、砂の感触も楽しんでいるようだった。	紙粘土をこねたり、まるめたり、型の中におしこんだりする活動を楽しみ、集中して取り組んだ。できれば、隙間があったりして今一歩であった。	3つの作品を組み合わせたとき、初めて思い出作品を作ったことがわかったようで、「六甲牧場の羊。」と大きな声で叫んだ。

○K児の取り組みの様子

この活動において、K児は、終始楽しんで熱中して作業することができた。はけで、水のりを羊の型の上へのぼす作業、そしてその上に砂をふりかけ、吹いて余分の砂を落とす作業、さらに、ダンボールの箱の底に画用紙を固定し、その上を絵の具のついたビー玉をころがして模様をつける作業、さらには、紙粘土をこね、型にはめながら額縁の縁を作る作業、どの活動にも興味を示して没頭して取り組むことができた。もちろん、K児には、これらの細切れの活動を寄せ集めれば、思い出作品ができるなどという見通しはもてはしない。かたちとしての作品に組み立ててあげるのは指導者の仕事であった。しかし、K児がこれほどまでに、どの活動にも注意・関心がとぎれず活動できたのは、初めてであった。

○思い出作品づくりを終えて

K児はこの学習を終えて、集中して作業する時間が少し長くなり、製作活動に対して意欲的な態度が見られるようになった。改めてできる素材を選定し、指導過程の中に遊び活動を入れることの大切さを考えさせられた。

※ 以上、身体表現活動を通しての実践（劇活動）と製作活動を通しての実践（思い出作品づくり）を取り上げ、紹介した。特にこれらの実践を通して、望ましい行動が形成されてきた。

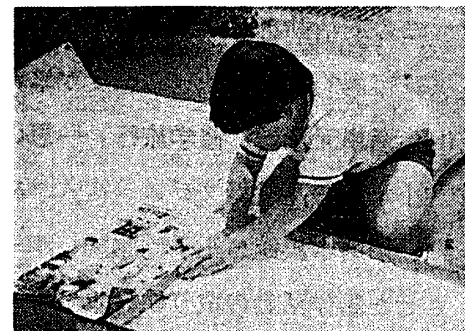


写真2 K児の作品

② からだづくりを目的的に行う取り組み

からだづくり養訓「リズム・サーキット」ーバンブーダンスーの取り組み

○バンブーダンスの基本的な考え方

バンブーダンスは本来、2本の動く竹の内外を、音楽に合わせて、様々の振付けで跳びながら踊る民族舞踊である。本校小学部では、子どもたちの感覚運動の発達、特にバランス感覚を育てる重要なものとして位置づけ、子どもたちの実態にあった跳び方にアレンジして取り組ませている。

K児は、このバランス感覚の発達に遅れが見られ、非常に足元がおぼつかなく、ころびやすい児童であった。こうしたことから、重点的にこの運動に取り組ませることにした。

(紀要「からだづくり養訓」P22～P31参照)

○取り組みの概要とK児の変容について

K児については、「かえるの合唱」等、2拍子のゆるやかな曲にあわせ、固定した2本の竹の内外を閉脚、開脚の繰り返しで跳ばすようにした。この取り組みを週に4回10分程度取り組ませた。

K児の変容については、表4に示す通りである。

表4 バンブーダンスにおけるK児の変容

期 項目	平成2年4月	平成2年10月	平成3年4月	平成3年10月
段階	2段階	2段階	2段階	3段階
K児の様子	かなりの力でもちあげる補助がなければ、両脚の開閉ができない。着地した時、ころびそうになることが多かった。	指導者が、手をもって多少ひきあげる援助はするが、自分で膝にためをつくって自分の力で跳びあがるようになってくる。	跳ぶタイミングを知らせたり、跳んだ後のバランスを保つという程度の援助で跳べるようになる。	ゆっくりではあるが、一人でバランスをとりながら、2本の竹の内外を跳ぶことができるようになる。

注) 段階は、P26に示すチェックリストによる。

○取り組みを終えて

K児のバランス感覚が良くなり、足腰が強くなったのは、この取り組みに負うところが大きであるとする。また、この効果は手先の巧緻性をも高めていったとする。

4. 考察及び今後の課題

以上、K児の取り組みについて、3つの柱のうち、2つの柱の取り組みについて述べてきた。これらの取り組みは、K児の集中持続力を高め、友だちとの協調的な関わりができる力を育んだ点、また体そのものの発達をさらに促したという点で成果をあげたものとする。また、ここでは具体的には触れていないが、K児の行動に対して行動分析的に伝えていく取り組みもK児の社会性を培う上で成果があったものとする。これらのことは、P60の図1、図2に裏付けられる。多少のいびつきをもちながらも、K児の発達のスケールは、この2年間で目ざましく広がっている。特に、落ち込んでいた「言語理解」「対人関係」における伸びに注目したい。この面での成長が、逆に言えば、K児の感覚運動的な問題行動を減少させているとも考えられる。「言語理解」が3歳4か月ともなれば、みて・つもり活動が十分にできる段階となり、K児の発達はさらに期待される。

さらに、K児の発達を鑑み、継続指導を行っていきたいとする。